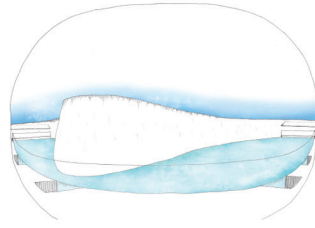
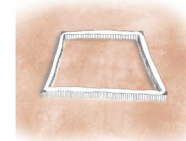
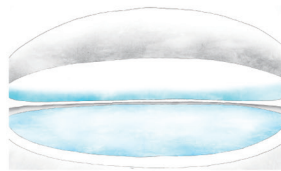


閼下のパレット

2011年3月11日、東日本大震災が発生した。それに伴って発生した津波により、広い地域に大きな被害を与えたことは記憶に残っている。何年後かには、この出来事を目の当たりにしていない世代も生まれ、記憶も薄れていくに違いない。

そこで、私は少しでも後世にこのような震災があったことを伝えることのできる遺構としての建築を提案する。この場所を訪れて、何気ない切り取られた風景を見て、歴史を知ることによって、訪れた人々の心のどこかで何かが浮かぶに違いない。

周囲の環境にうもれてしまい、影響を受けてしまう建築ではなく、異彩を放ちながら、周囲の環境に影響を及ぼし、数百年後には被害を最小限にとどめることができるようなサブミナル効果¹²を与えられるモニュメンタル¹³な建築を考えた。



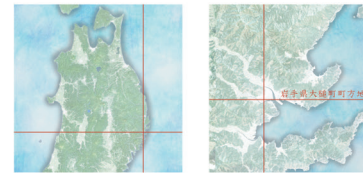
11 閼下(いさか)：利根川が分岐して東海に流れることのない状態。流れ止まり状態。そして、利根川が分岐する点に、この建築を配置し、歴史を語りかける存在となる。

12 サブミナル効果：通常建築が環境に馴染んでいる「意識」以下に存在し、いわゆる意識外で、環境に馴染みながら、被害を最小限にとどめることのできるような建築。

13 モニュメンタル：記憶すべきもの。歴史に記憶されるもの。「伝世品」。

敷地

敷地は若手県大垣町可方地区。この地域は、縄文時代の遺跡が多く見られ、北上山地から迂回経路として大垣湾へ流る大垣川と小徒川が形成する沖積平野部が地域の中心をなしている。入口は大垣湾に面し海沿いに集まり、鉄道や主要道路も海岸に沿って受っている。



歴史



太平洋沿岸部に位置するこの地域の津波による被害は、2011年3月11日の東日本大震災によるものだけでなく、過去に何度も見舞われている。



869年(貞観八年)、1611年(慶長十六年)に津波があり、これにより三陸沿岸で溺死した人は数千人にも及ぶといわれている。



明治三陸地震津波(1896年6月15日)この時に押し寄せた波高は、最大で8.7mだった。この地域は、津波によって大須賀の全部が破壊された。

昭和三陸大津波(1933年3月3日)この時にも大きな被害が発生したが、再び被災する可能性のある低地に町を再びつくるかわりに、威力を緩衝地帯で軽減した津波を防浪堤で受け止めるように考えられていた。

チリ地震津波(1960年5月24日)この時は大垣町では、産業などの被害が甚大だったが、人的被害はほとんどなかった。この後の津波対策の特徴は、防浪堤などの構造物が主体となったことである。結果、防浪堤と河川堤に沿ったところまで街区が整えられ、道路が通され、海のすぐ際まで甲斐なされたことになった。

現在の復興計画によると、津波に襲われた記憶を町にとって忘らわしめようとせず、盛り上げを行い、新たなものを一から作るように考えていると思われる。しかしながら、それで良いのか個人的には考える。歴史的に見て、何度もこの地は津波による被害に見舞われていることや、防浪堤という人工物に頼ってきたばかりに低地へと、街を広げてきたことが繰り返されるような気がする。そこで、本計画はこの場所を東日本大震災に襲われた状況を遺構として整備し保存する。モニュメンタルな建築を通して、記憶を風化させることなく、後世に伝えていくことを考えた。



東日本大震災津波の概要
発生日時:
2011年3月11日
規模:
マグニチュード9.0



周辺の数値:
震度6弱(彦根市)
被害棟数(棟):
全壊1421、一部損壊1
死亡者数及び行方不明者
数(大垣町全体×人):
死者202
行方不明者251



この対象敷地は、大垣町東日本大震災津波復興計画において、移転促進区域に設定されている。それにより、この場所に住んでいた住人は違う場所へ移住しなくてはならない。そして、堤防が整備され、この場所には、多目的広場・自噴井を生かした公園・仮設グラウンド・緑地の森が作られようとしている。



この地域の町の住宅地の広がりを追ってみる。昭和27年頃は、高台にあった役場を中心として山沿いに住宅地が広がっていた。昭和29年に役場は川に近い低地へと移転し、高度経済成長とともにこの町の人口は増加した。この頃には役場を中心として、住宅地が広がっていた。大垣川・小徒川の沿岸の土地では、河川改修により川の氾濫の危険性が減少した。そのため、チリ地震津波後は、埋め立て工事が行われたり、宅地分譲によって住宅地が設定された。平成に入るとさらに海の近くへと引き寄せられるように住宅地が建設されるようになった。そのため、今回の震災では被害がより大きくなったとも考えられる。



1902年の
建造物の分布図
1908年の
建造物の分布図
2001年の
建造物の分布図
2010年3月に
撮影した若手県大垣町
2011年3月28日に
撮影した若手県大垣町



1902年の
建造物の分布図
1908年の
建造物の分布図
2001年の
建造物の分布図
2010年3月に
撮影した若手県大垣町
2011年3月28日に
撮影した若手県大垣町



提案

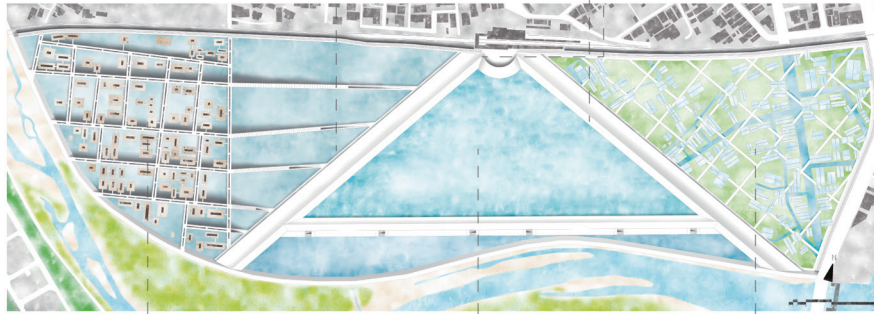
本計画では、東西に約1000m、南北に約270mの敷地を大きく分けて、15つのパレット（施設）を提案する。場所ごとに色（機能）をつけ、それらを孤立する様に区分けするのではなく、シーツエンスにすぎず、グラデーションのように緩やかに景色が変化していくように設計した。

安全のパレット

ここで過ごすための宿泊施設。また、南側の連絡通路には大広間、中広間、小広間、レストラを配置している。
安全：川の磯もなくて、くつろいで休むこと。
安全：川の磯もなくて、くつろいで休むこと。

水端のパレット

施設のインフォメーションセンターとしての事務室や地場産物売り場、水端一面を見渡すことのできる休憩所を配置している。
水端（みずはな）：水の面ははじめのときや朝、また、夕暮の静まり、物事の最終、面はため、はじまり。



啓示のパレット

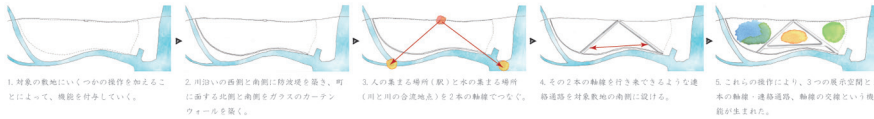
震災に関する写真や映像などのデータを展示・保存を行う。後継へ歴史を伝えるとともに、永遠に歴史を受け継がれる。啓示：よくわかるようにあらわし示すこと。人間の力では知ることのできない宗教的真理を、神が神自身または災厄など超自然的存在を介して人間へ伝達すること。

追憶のパレット

水盤となっている天井から、柔らかな光が降り注ぐこの展示室。この場所を津波が襲いけがれが撤去された状態での保存する。
追憶：過ぎ去ったことに思いをはせること。過去をしのぶこと。追憶。

水盤のパレット

かつて建物がたくさんあり、基礎部分だけが残っている所に、家型フレームを挿入する。そして、その場所十字の動線を生かす。
水盤（みづせ）：降りないない年月。水底。



1.対象の敷地についていくつかの操作を加えることにより、機能を付与していく。
2.川沿いの西側と南側に防波堤を築き、河川面とする高層と高層をガラスのカーテンウォールを築く。
3.人の集まる場所（駅）と水の集まる場所（河川）の合流地点を2本の軸線をつなぎ、この軸線が対称敷地の南側に設ける。
4.その2本の軸線を行き来できるように連動する構造（橋、通路、階段、軸線の交差点）を構築する。
5.これらの操作により、3つの展示空間と2本の軸線、橋、通路、軸線の交差点という機能が生まれた。

設計手法

操作1 / 動線の種類

この場所には一休が設けられるだろう。動線の種類によって、動線分類を考える。



操作2 / 高さの種類

この場所は比較的高低差がない。しかしながら、高さの基準となる要素を取り入れることによって高低差を付ける。



操作3 / 見渡した時の敷地に対する水の割合

この場所は往定が林立していた。しかしながら、もって以前までは、今より水田が広がっていたりして、水が風景に溶け込んでいた。



操作4 / 空間分割の素材

広大な敷地を緩やかに分割することによって空間の種類を増やす。その分割する素材を考えた。



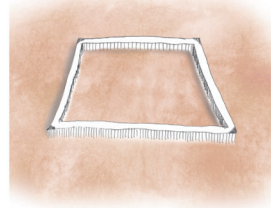
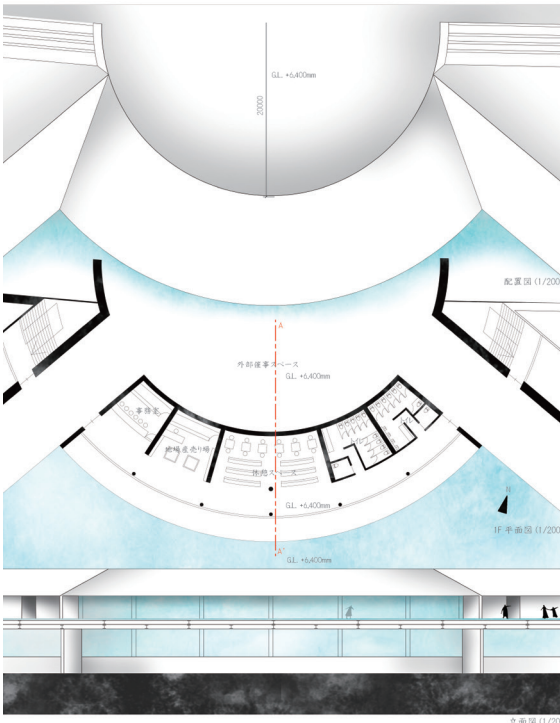
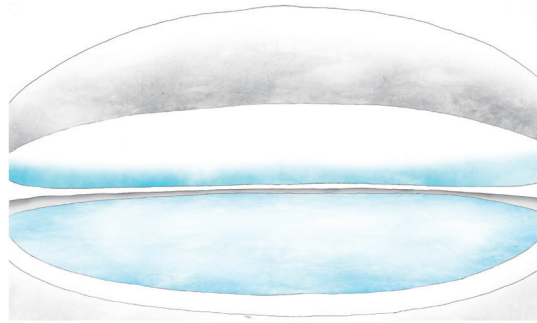
水端のパレット

駅から降りると半径20mの一面白い壁に囲まれた広場と空が広がる。この場所では、主に武蔵などの催事場として使うことを目的としている。駅を円の中心とし、又々中心からとき離れたように散っていく。
トンネルをくぐると、水端のパレットがある。この場所には、施設全般を管理する、インフォメーションセンターとしての事務室。この地域の地場産品や伝統工芸品を取り揃える地場産物売り場、水盤一面を見渡すことのできる休憩スペースなどを配置している。

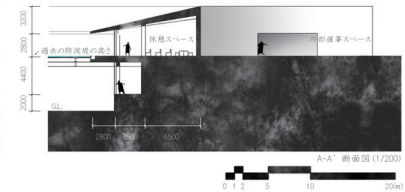


追憶のパレット

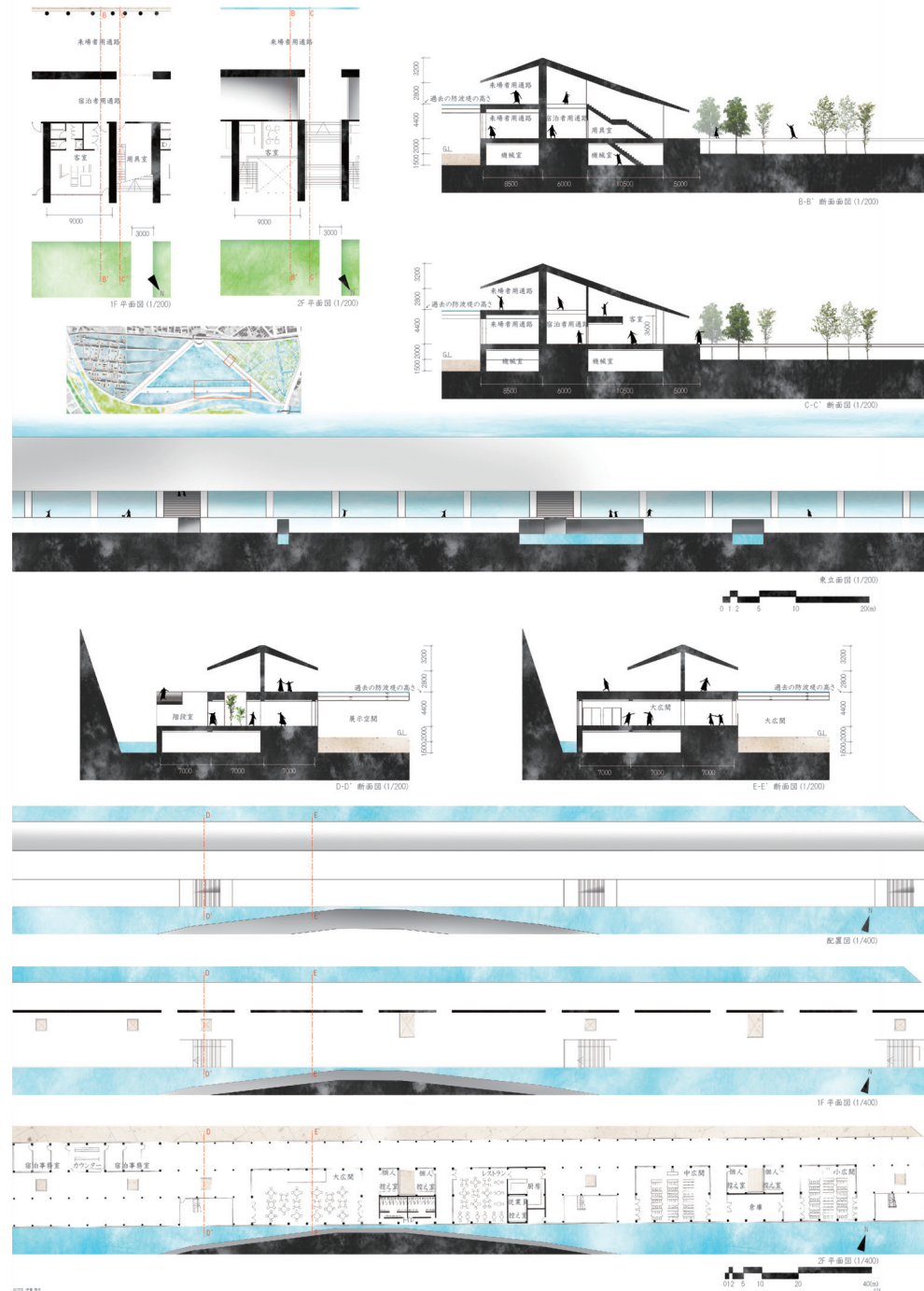
水端のパレットの休憩スペースから見渡すことのできる水盤の下には、追憶のパレットを配置した。追憶のパレットは主に現在の様子そのまま保存した遺跡を見ることのできるスペースとしている。現在の様子を見渡すことにより、津波の跡を残すか、地震の痕跡を目の当たりにできると考える。なるべく風化せずに保存したいと考えたため、この場所を屋根と壁で覆う必要があると考えた。そのため、回廊全体でこの場所を囲み、水盤を天井に配置することにした。上部から差し込む光は、一瞬一瞬違う表情をする水面によってゆらぎ、切実な空間になるように設計した。



追憶のパレットでは、この場所にあった建物の基礎をそのまま残すこととする。かつてこの場所が人間の拠り所となり住まう所であったことを残すことができると考える。

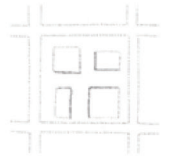


0 1 2 5 10 20m

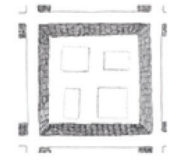


啓示の パレット

啓示のパレットでは、この地域に関する歴史や、地形や気候などで被害にあった出来事や、等尺の敷地を結合する、薄暗い空間で歴史などを学ぶことと同時に、津波の恐ろしさなどを想像させる空間とする。14.1mの通路から12.1mの展示空間の建物を見下ろすことによって、津波の高さなどを見て知ることができる。展示空間の上に植栽をすることによって、この建物ができがらの時代の経過を知ることができる。



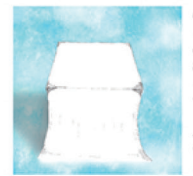
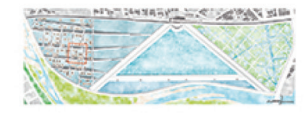
この場所を支配する遺構に作り変える。かつてこの場所は、御伽が広がっていた。



かつて建物があっていた場所に高さ12.1mの展示室を作る。12.1mはこの地域で記録した津波の高さである。



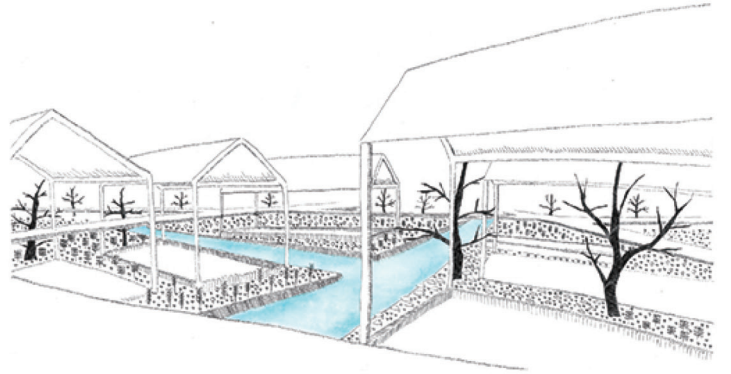
かつて道路があっていた場所に高さ14.1mの新緑空間 兼 展示室を作る。14.1mはこの地域に作られる建物の高さである。



啓示のパレットでは、この場所にあった建物の基礎は、その場所を高く盛り上げることに。この場所を建てた建物の対する碑とする。この場所で、人間からの誇りとして機能したことをたえる。

永世の パレット

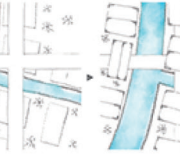
永世のパレットでは、かつてこの地域に建物がたくさん建っていて、基礎だけが残っているところに家型フレームを挿入することによって、津波の痕跡を表現する。この場所のオーダーに合わないように新たに建物を挿入することによって、過去から存在する水、津波が襲うまであった家の記憶、その時からこの場所に住きつる建物が、歩くことによって不規則に現れる。永世のパレットの部分を野原として、整備し直すことで、水と親しみやすく、歴史を知る空間として機能する。



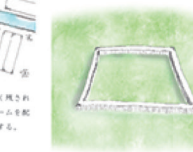
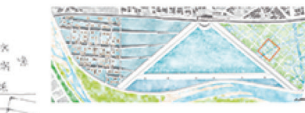
津波による被害は歴史あり、現存は、津波が襲った時に残った基礎だけが残っている。



現存、津波が襲った時に残った基礎だけが残っている。このことによって、津波の痕跡を表現することになる。



新設に既存建物を建物などを併せよう。このことによって、より敷地に入り込む空間体験ができる。



永世のパレットでは、この場所にあった建物の基礎は、花壇として機能することによって。親しみやすい場所へと設計する。歴史と触れ合いながら、出来事を学ぶことができる。

